素顔の孫文

国父になった
大ぼら吹き

横山宏章

岩波書店

素顔の孫文

国父になった大ぼら吹き

横山宏章

岩波書店

横山宏章

1944年，山口県下関市生まれ．一橋大学法学部卒業，朝日新聞社記者を経て，一橋大学大学院法学研究科博士課程退学．法学博士．
明治学院大学法学部長，県立長崎シーボルト大学国際情報学部長，北九州市立大学大学院社会システム研究科長，同大学アジア文化社会研究センター長を歴任．現在，北九州市立大学大学院社会システム研究科教授．
主な著書に，『孫文と袁世凱――中華統合の夢』(岩波書店，1996年)，『中国を駄目にした英雄たち』(講談社，1999年)，『陳独秀の時代――「個性の解放」をめざして』(慶應義塾大学出版会，2009年)など多数．

素顔の孫文 国父になった大ぼら吹き

2014年4月22日　第1刷発行

著　者　横山宏章（よこやまひろあき）

発行者　岡本　厚

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
http://www.iwanami.co.jp/

印刷・法令印刷　カバー・半七印刷　製本・松岳社

© Hiroaki Yokoyama 2014
ISBN 978-4-00-001082-5　Printed in Japan

R〈日本複製権センター委託出版物〉 本書を無断で複写複製(コピー)することは，著作権法上の例外を除き，禁じられています．本書をコピーされる場合は，事前に日本複製権センター(JRRC)の許諾を受けてください．
JRRC　Tel 03-3401-2382　http://www.jrrc.or.jp/　E-mail jrrc_info@jrrc.or.jp

素顔の孫文　国父になった大ぼら吹き

はじめに——あだ名は「孫大砲」

孫文(孫中山)は一九二五年三月十二日、北京で死去した。一八六六年十一月生まれだから、満五十八歳だった。中国暦でいえば民国十四年であるから、念願の清朝を打倒して最初の臨時大総統になった共和国誕生から十四年目であった。死去の翌日に『大阪朝日新聞』が、孫文の死を次のように報道している。なかなか興味ある批評なので、まず紹介したい。

「日本には犬養毅、頭山満の諸氏を始めて知己が頗る多く、日本に対する憧憬れは強いもので、日本に亡命中自ら中山某と称した所から最近は孫中山と号してゐた。革命家ではあつたが、その思想は極めて民族的の色彩が濃厚だつた。そして恰も列強の植民地の如き状態から支那を救はねばならぬと力説してゐた。孫を斯程まで人物にしたのは、彼が超人的な大法螺吹きであつたことだといふ人がある。支那では彼のことを『孫逸仙』『孫文』とはいはず、『孫大砲』といつてゐる。政治家もで者も、書生も労働者も、女も子供も皆さういふ。『孫大砲』のニックネームは真に国中に鳴り響いてゐた。彼が第一次大総統となつたのも、国民党総理のカパシテイをもち得たのも、徹頭徹尾例の『大砲』のお蔭であるる、ともいへる。三寸不爛の舌で七転八起、彼の重畳たる逆境を切り抜け得た偉丈夫英雄である」(「孫文遂に逝く　偉大な彼の舌の力」『大阪朝日新聞』大正十四年三月十三日)。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「孫大砲」という名称は、辛亥革命後に、孫文の大鉄道網構想にあきれた袁世凱（えんせいがい）がつけたあだ名ともいわれているが、定かでない。だがそのあだ名は広く流布していた。中華民国を真の「民の国」にすべく西欧啓蒙思想・デモクラシーを強調し、人間解放の思想革命を掲げた「新文化運動」を指揮した陳独秀（ちんどくしゅう）は、孫文には批判的で、一九一九年に次のように述べている。

「ある人は、孫中山が理想ばかりを語る大ぼらを口にするので、『孫大砲』というあだ名をつけている」（「随感録・威大炮」）。

あだ名の「孫大砲」は、日本的に訳せば「孫の大ぼら吹き」、あるいは「ほら吹き孫文」という意味である。別に、「孫大泡」という説もある。「大泡」は、広東語では「虚言無実」（言葉は空っぽで中身がない）という意味らしい。いずれも同じだ。

広東の一医生だった孫文が「清朝を打倒する」と大言壮語したほら吹きは、ほら吹きに終わらず、有言実行で辛亥革命を導き、アジア最初の共和国といわれる中華民国を創建し、初代の臨時大総統に就任した。口先で大風呂敷をひろげるだけの「大ぼら吹き」ではなく、約束通りちゃんと実現したのに、なぜ「大ぼら吹き」のあだ名で呼ばれ続けたのか。

孫文が主張したのは、次のような盛り沢山の課題であった。

○漢民族が満州民族に抑圧されている異民族支配、民衆が皇帝に抑圧されている王朝支配、この理不尽な支配体制を打倒して、中華を回復、共和国を樹立する。

○辛亥革命後の北洋軍閥支配に対しては、北京政府や各地を軍事的に支配する封建的軍閥を打倒し、民主政権を樹立する。

○アヘン戦争の敗北から始まった西欧列強の中国侵略、中国分割を克服し、完全独立の主権国家を回復する。
○そのためには不平等条約を廃止し、関税自主権の回復、治外法権の撤廃、租界・租借地の廃絶を実現する。
○近代的な強力な主権国家を建設するため、自らが組織した国民党・国民革命軍による全国統一を進める。
○世界に通用する近代的国家を実現するため、直ぐには実施しないけれども、いずれは民主的憲政を目指す。
○全国的な鉄道網を整備し、広大な中国の各地を結んだ産業国家を建設し、国民の生活を豊かに引き上げる。
○資本主義的階級格差、階級対立を生む自由な市場経済に頼るのではなく、耕地の投機を戒め、国家が産業、資本をコントロールして、産業振興を実現する。

このような様々な主張を叫び、完全独立した統一共和国のもとでは、わかり易く「人民を皇帝にする」と約束した。

とはいえ、他方では、後述するごとく、一般大衆は無知蒙昧な愚民であるから、当分は愚かな国民に権力を与えず、有能な孫文・国民党が一党独裁を続ける、という独裁体制を固めた。無能な「人民皇帝」は立派な「党皇帝」に従うように訴え、中国が衆愚政治に陥るのを危惧した。

それだけではない。中国侵略に野心を抱く日本の軍部に、資金援助や軍備支援を求めるかと思え

ば、ロシア革命が勃発すると、一転して革命ロシア(ソ連)に軍事支援、革命指導を求めた。党内にも反対が多かったものの、生まれたばかりの中国共産党との国共合作を実現した。軍閥政治を打倒するといいながら、張作霖や段祺瑞といった北洋軍閥と手を結ぶことすら辞さなかった。

まさに、孫文の何を信じて良いのか。中国の大衆からみれば、ガムシャラにあれこれと大砲をぶっ放す「ほら吹き」そのものに映ったのであった。

本書は孫文の伝記である。これまで、中国はいうに及ばず、日本においても多くの孫文伝が出版されてきた。私もすでに、伝記として『孫文と袁世凱』(岩波書店)、研究書としては『孫中山の革命と政治指導』(研文出版)を上梓している。それでも屋上屋を架そうとするのは、これまで描かれてきた多くの孫文像がその実態を離れて、偶像化されてきているからである。そこで既存の孫文像とは異なった観点から、すなわち立派な革命家としての顕彰伝記ではなく、思想として「民権主義」(民主主義)を掲げながらも、実際の政治過程では平然と民主革命を裏切ってきた、イデオロギーに縛られない柔軟というか、あるいは現実におもねる胡散臭いというか、摩訶不思議な革命家であった孫文の実態を明らかにしようと思ったからである。

孫文の呼び名は複雑である。譜名は徳明、名は文。幼名は帝象。字は逸仙。辛亥革命後は中山と名乗った。日本亡命中に「中山樵」の偽名を使ったことに由来する。日本では孫文と呼ばれることが多いが、中国では孫中山が一般的である。中国で出版された全集名は『孫中山全集』と表記され、親しみを込めて「中山先生」と呼ばれている。中華民国では、「総理」あるいは「国父」の尊称で

呼ばれることもある。

そして欧米では、医師出身であるからDr. Sun Yat-sen（孫逸仙の広東語読み）が使われる。公文書への署名は孫文であった。辛亥革命以前の日本亡命中、日本でも孫逸仙と表記する場合が多いが、ここでは、現代日本で広く使われている「孫文」と呼ぶ。

肩書も、興中会、中国国民党など革命結社の党魁としての「総理」、中華民国南京臨時政府の「臨時大総統」、広東軍政府の「陸海軍大元帥」と、多様である。一九四〇年、当時の国民党政府は、孫文を「国父」の尊称で呼ぶように通達した。

総合研究 辛亥革命
辛亥革命百周年記念論集編集委員会 編
A5判六二〇頁 本体七八〇〇円

辛亥革命と日本政治の変動
櫻井良樹
A5判三九四頁 本体九〇〇〇円

五四運動の残響
—二〇世紀中国と近代世界—
ラナ・ミッター 吉澤誠一郎 訳
A5判三六〇頁 本体七〇〇〇円

近代中国の政治文化
—民権・立憲・皇権—
野村浩一
四六判三一〇頁 本体三七〇〇円

新編 原典中国近代思想史3
民族と国家
—辛亥革命—
村田雄二郎 編
A5判三八二頁 本体五〇〇〇円

孫文革命文集
深町英夫 編訳
岩波文庫 本体一一四〇円

岩波書店刊
定価は表示価格に消費税が加算されます
2014年4月現在

目　次

はじめに――あだ名は「孫大砲」

第Ⅰ章　広東の田舎育ち
――ハワイ経験と医学の道　1

一　華南の広東香山県翠亨村に生まれる　2
二　ハワイへ渡り、四年間すごす　10
三　香港の医学学校で医師の道を志す　16

第Ⅱ章　清朝打倒の革命家へ
――興中会、同盟会の結成　27

四　興中会を創設し、革命の旅へ船出する　28
五　恵州起義で日本の協力を期待して弄ばれる　32
六　会党（秘密結社）依存の辺境革命に頼る　41
七　日本に亡命し、日本人との交流が深まる　49

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八　中国同盟会を結成し、「四綱」「三序」を確立する　55
九　同盟会の内部対立が激しくなる　66

第Ⅲ章　反満革命の成功と反袁革命の敗北
——中華民国の誕生——　77

一〇　辛亥革命が勃発し、中華民国を建立する　78
一一　袁世凱へ政権を禅譲する　92
一二　国体をめぐって宋教仁と対立する　98
一三　日本訪問と宋教仁の死、そして第二革命で敗北する　105

第Ⅳ章　日本亡命と日本への依存
——孫文独裁の中華革命党——　115

一四　再度日本に亡命し、日本政府への依存を深める　116
一五　大アジア主義論者、大陸浪人との関係を考える　123
一六　孫文独裁の中華革命党を創設する　129
一七　女遍歴の果て、若い宋慶齢と結婚する　135
一八　日本への利権譲渡に甘い体質が露呈する　147

第V章　二度の広東地方政権とその挫折 155
——「孫文学説」の形成——
一九　袁世凱が皇帝となり、護国戦争が起こる　156
二〇　北京に対抗して広州護法政権を樹立する　161
二一　孫文の「愚民論」が形成される　170
二二　諸民族を統合する「中華民族」論が生まれる　183
二三　第二次広東政府が樹立され、陳炯明の叛乱で追われる　192

第VI章　コミンテルンの支援と国共合作 201
——棄てきれない軍閥同盟志向——
二四　中国共産党が創立され、国共合作が成立する　202
二五　コミンテルン、ソ連との連携を孫文から見る　212
二六　孫文と陳独秀は両雄並び立たず　220
二七　客軍を動員して第三次広東軍政府を樹立する　225
二八　広東経営に苦労は絶えず、広東放棄を図る　231
二九　軍閥との提携である反直三角軍事同盟を模索する　242

第Ⅶ章　講話「三民主義」と遺嘱「革命はいまだなお成功せず」——249
三〇　国民党一全大会を開催し、「三民主義」を語る　250
三一　孫文を支えた胡漢民、汪精衛もまた個性的である　261
三二　北上して、北京で客死する　273
後記——異端を怖れず　281
参考文献一覧　285
索　引

第I章　広東の田舎育ち

――ハワイ経験と医学の道

17歳の孫文

一　華南の広東香山県翠亨村に生まれる

たいていの伝記では、何時、何処で生まれ、どのような家庭で育ったのか、という記述から始まる。ところが多くの孫文伝には、それと同時に、生まれた時期、生まれた地域の歴史的背景が語られる。なぜなら稀代の革命家は、革命的な時代背景、社会環境のもとで、はじめて革命家として成長すると信じられているからである。

孫文も、貧しい農家、しかも被差別集団である客家に生まれて反骨精神を磨いたとか、あるいは巨大な農民叛乱であり、清朝支配を揺るがした「太平天国の乱」(一八五〇年―六四年)などの余韻が残った時代が、孫文を革命家に育て上げたという、いわゆる「革命家神話」が存在する。

孫文は一八六六(同治五)年十一月十二日、広東省香山県翠亨村の「貧しい農民の家庭に誕生した」(茅家琦等『孫中山評伝』)といわれる。孫文を世に知らしめた日本での刎頸の友・宮崎滔天も、一九一一年の辛亥革命の最中、「孫逸仙は広東の香山県の片田舎の二百戸許りの小農村の、然も極く貧乏な百姓の子に生れた」(「清国革命軍談」)と記している。

孫文が誕生した一八六六年とはどのような年なのか。まず日本でいえば、幕末の動乱期で、薩長連合が成立した年である。すなわち明治維新の大政奉還がなされた前年に当る。中国では、清末動乱の始まりを告げる太平天国の乱が鎮圧された直後である。

太平天国を築いた洪秀全は客家出身といわれ、キリスト教にもとづく宗教結社「拝上帝会」を組

織し、それはさらに「太平天国」と名乗る反清政治結社に膨らんだ。一八五〇年、広西省金田村から清朝打倒を掲げて挙兵し、次々と共鳴した叛乱農民が流入して巨大化した太平天国軍は長江流域まで北上し、江蘇省の南京（天京と改称）に革命政権・太平天国を樹立した。広く江南一帯を支配したのである。しかし一八六四年、清朝軍の反撃によって天京が陥落し、洪秀全も死去した。こうして十五年近く続いた太平天国の乱は終息した。

しかしそれは「太平天国革命」運動といわれ、虐げられてきた農民の革命運動でもあったと評される。その革命性は、異民族支配の清朝を打倒しようという民族革命にあるだけではない。掲げた代表的な革命綱領の一つは「天朝田畝制度」である。

太平天国研究者の小島晋治『太平天国革命の歴史と思想』によれば、「天朝田畝制度」とは「土地および飯米部分を除く一切の土地生産物、副業生産物を公有し、土地の耕作権を均等に配分することによって、絶対的に平等な共同体を建設しようとするものであった」。それは「小農による単純再生産の絶対的牧歌的な安定が志向されていたのであり、拡大再生産への志向は現れてはいない」と見なされ、「非ブルジョア的な綱領」であったと断定する。

とはいえ、土地の平均主義をうたい、その平等志向が収奪に苦しむ農民の心を捉えた。女性の自由を縛る纏足も禁止した。最後には、包囲された清朝側の軍隊との戦いに敗れたものの、満州族が支配する異民族王朝の清朝に逆らった「太平天国」神話は、農民の世界でも語り続けられた。

幼い時代の孫文は、太平天国に参加した老兵から聞かされる話に陶酔した。太平天国軍に入隊していた村人の馮爽観が、孫文宅の前にある大きなガジュマルの木陰に集まった子供たちに洪秀全の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com